日本とモンゴル - サステイナブルな協力を考える -

岡田 朋和*

モンゴル国を訪ねる

今回は,自然科学分野の研究交流や広い民間レベルの交流が1990年代以後に盛んになりつつあるモンゴル国と日本との関係を,1955年に初めて訪ねた私の経験を基に話します.

私がモンゴル国との接点を持ったのは 1995 年 8 月のことでした.団体旅行では無く,ホームステイで首都ウランバートル,旧都カラコルム,南ゴビを訪ねました.また 1997 年 8 月に南ゴビ,フブスグル,1999 年 12 月にウランバートル,ヘンティを,2001 年にウランバートル,ゴビアルタイを訪ねています.前 3 回は観光,最近 1 回は調査を目的としています.

研究者ではない私がモンゴル国を訪ねる際に気を使うのは,日本と違う自然・社会環境が持つ特性や現地の人々から聞く話を,日本との比較,又

は前回訪問時との比較などにより,常に「違い」として意識することです.着目点は,自然科学分野の研究で行われるような明確なものではありませんが,常に先入観に囚われない視点を持つよう意識していることは,研究者の方々と共通点があるかもしれません.



Fig. 1 1995 年 8 月撮影 Ulaanbaatar, Mongolia



Fig. 2 2001年10月2日撮影 Ulaanbaatar, Mongolia

NPO 法人モンゴル・ボランティアネット専務理事

都市環境

ウランバートル市内にザイサン丘という先勝記 念碑の建つ丘があります.1995 年初めて訪ねた際 に石炭火力発電所からの煤煙が気になったのですが,現在,盆地に位置する首都ウランバートル上 空は,冬季に上空に出現する逆転層により閉じこめられる大気汚染が深刻になっています.

また,市内のゴミ収集作業の停滞,何らの防護 措置もされない郊外谷間の最終処分場に搬入され る種々の廃棄物など,社会環境の変化によって首 都に急速に流れ込む人々の住環境の悪化などと相 まって首都ウランバートルの環境は大きな問題を 抱え込みつつあります.

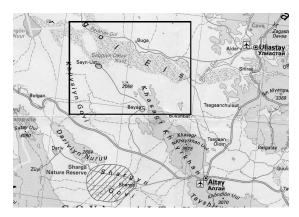


Fig. 3 ゴビアルタイ県 Sayn-Ust (フフモリト村)

荒漠化(砂漠化)

私はゴビアルタイ県 Sayn-Ust(フフモリト村)を2001年9月末に訪ねました.社会主義時代末期に国が関わるプロジェクトとして,ソム中心地北側に,砂砂漠からの飛砂を避けるための多年草による植生帯と防砂林の形成が進められようとしていたところです.しかし,そのプロジェクトは市場経済への移行の中で中断を余儀なくされていました.

ところが、現地では当時携わったいた人間関係が健全な形で現存しており、また、現地でのヒアリングからプロジェエクトに関わっていた研究者がウランバートルに健在との情報を得て、10月頭の帰国直前に自宅に訪ねることが出来、今後の情報・意見の交換と協力とを約して帰国しました。



Fig. 4 Tudeviin Baasan 氏



Fig. 5 Sayn-Ust 郊外にて

サステイナブルな協力

モンゴル国を中心に遊牧の文化を受け継ぎながら生活しているモンゴル民族は,従来の文化の在り方そのものがサステイナブルであるととらえられてきました.しかし都市部での生活・地方での生活共に,必ずしもそうは言えない状況も現出していると思われます.



Fig. 6 薪材の伐採 Baasan 氏提供

今後,市場経済へのアクセスに伴う環境への負荷の増大をモンゴル人自身がどう考えていくのか?また,地球温暖化に影響を受けているとも言われる荒漠化(砂漠化)に対して,日本人として自身がどう考え行動していくのか?を国境を越えて共に考え,解決の方法を探りながら歩んで行きたいと思っています.

自然科学分野の研究も長期的な視点からは,その成果が社会的な還元をどう行っていくのか?が課題になってくると思います.その中で今日の話が何らかの一助になれれば幸いです.



Fig. 7 Ulaanbaatar 市内のゴミ回収